

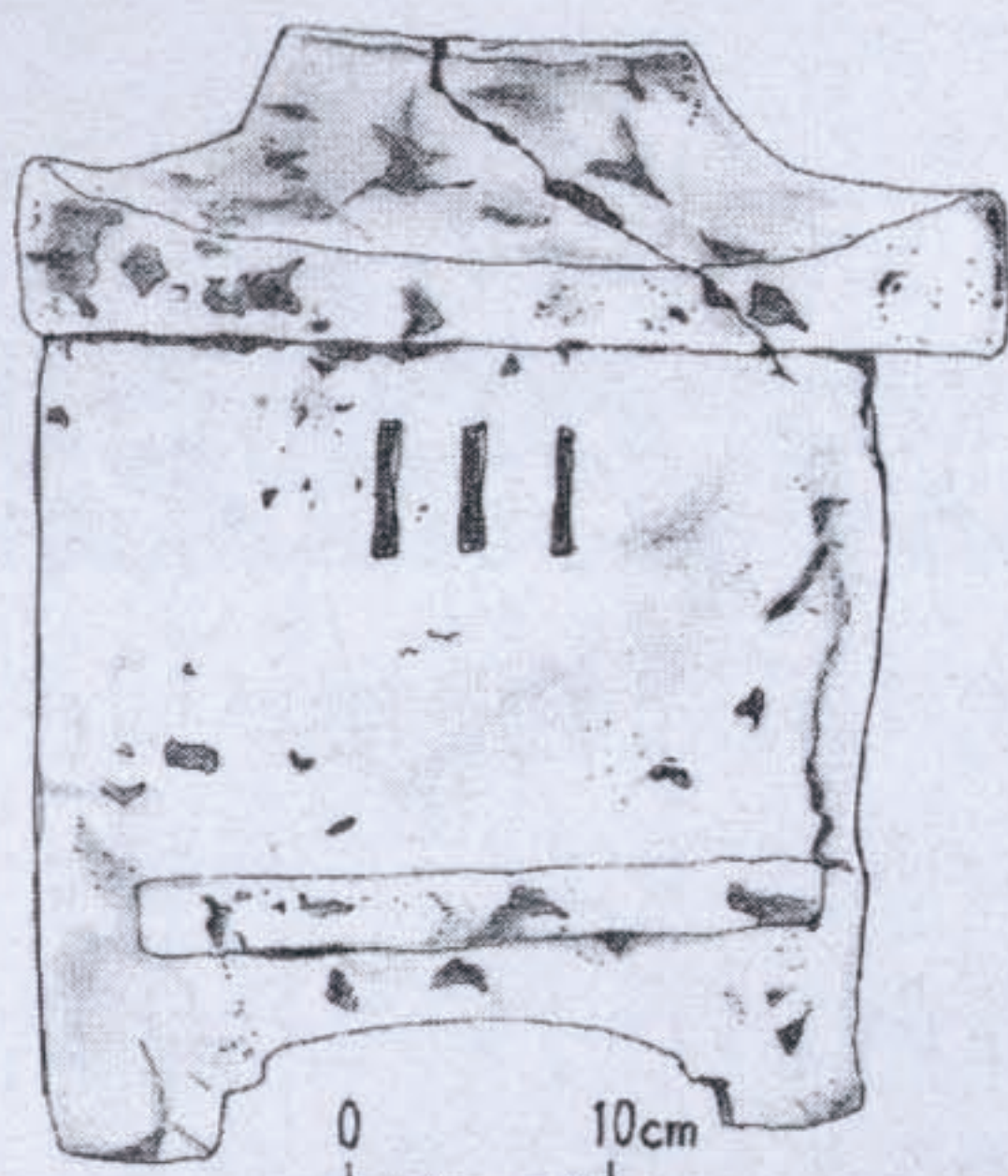
ある日の調査ノート

町史の仕事をして
いると、おもしろい
ものや不思議なことに
出くわします。

そう、あれはつい先日
のことでした。

その日は、他の職員と汗
だくになって、戦跡壕の調
査を行うため、山沿いの道
を歩いていました。

壕さがしに夢中になって
いる私を呼び止める声。な
んだらうと近づいていくと、
そこにはウミイシ（サンゴ
石灰岩）でつくられた厨子
甕（遺骨を納める骨壺）が。



今回発見されたズシガメの実測図

なんでも、墓の改修工事
の際、近くの土中より見つ
かったとか。改修された墓
のものではなさそうです。

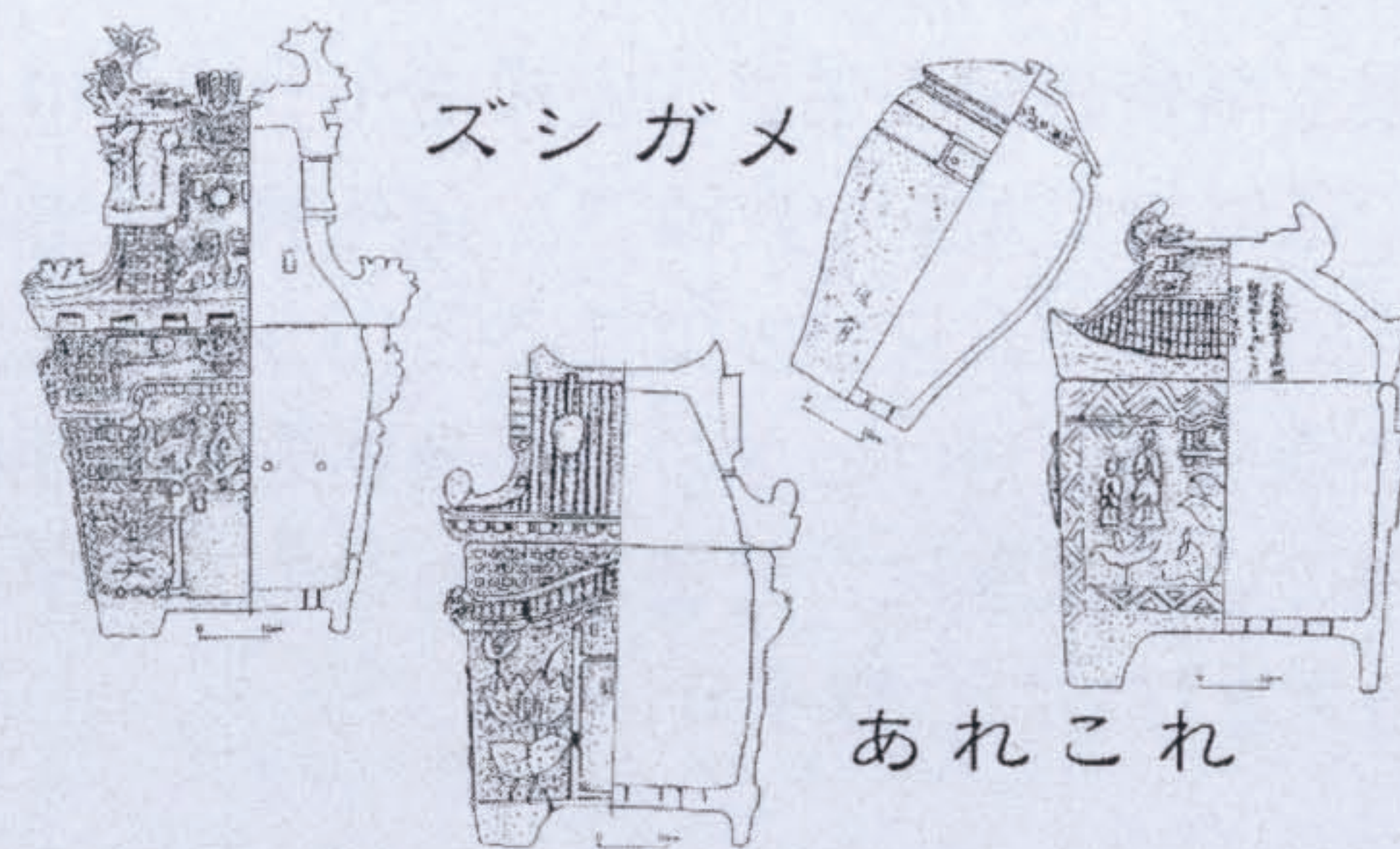
ウミイシを家型に加工し
た厨子甕の中には、ボロボ
ロになった遺骨と、高さ八
センチほどの千手観音の彫
像が入っていました。

また、厨子甕の横には、
墨で書かれた文字が。銘書
と思われるその文字を読ん
でみると「康熙廿六年丁卯
十二月：（続く）：」とあ
ります。

康熙とは中国の年号で、廿
六年は二六年、丁卯はその
年の十干十二支をあらわし
ます。康熙二六年は西暦で
いうと一六八七年。

「へえ、そんなに昔から
ここに…」とため息をつく
私に、墓工事のおじさんは、「お
払いをしてもらったユタ（*

注①）の話だと、この厨子
甕に納められている人は、



上江洲均『沖縄の暮らしと民具』より

二四、五歳くらいのハンサ
ムな青年だつてよ。」とニ
ヤリ。

いくら私が独身だといっ
ても、そりやないよ。

この日は、壕の調査と、
厨子甕の発見という一石二
鳥の成果を得ました。まさに、
「なんとかも歩けば棒に当
たる」。

*注①：呪術的・宗教的職
能者のこと